

# 言語の起源はコミュニケーションか?:計算心理言語学の観点から

# 梶川康平

# 東京大学大学院 言語情報科学専攻修士2年 · 国立国語研究所

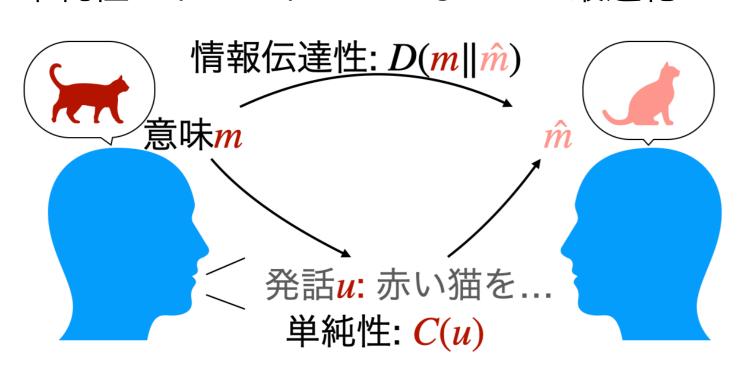




# 言語はコミュニケーションにおいて効率的か?

#### 自然言語にはなぜは普遍性が存在するのか?

- 効率的なコミュニケーションを実現した結果だから [Jaeger & Tily, 2011; Kemp et al., 2018; Gibson et al., 2019]
- 認知制約のもと、伝わる意図・情報が最大化されている(informative) 一方、産出・理解のコストが最小化されている(simple)状況
- 情報伝達性と単純性のトレードオフのもとでの最適化



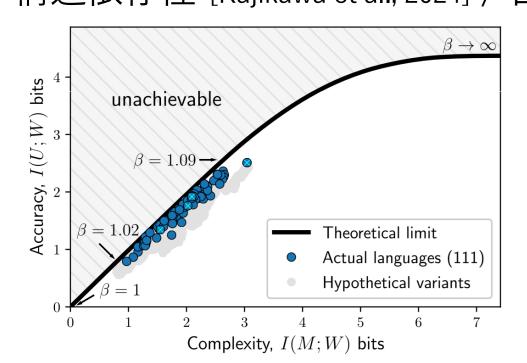
### なぜいまこの研究?

- 情報理論の進展@心理言語学
- コミュニケーションの数理理論と人間の言語使用の関係が徐々に明らかに
- 言語使用それ自体が効率的、合理的
- 汎用的な言語処理モデルの登場
- 計算機上でのシミュレーションという方法論の確立
  - 「反事実的 (counterfactual)」な状況の検討が可能

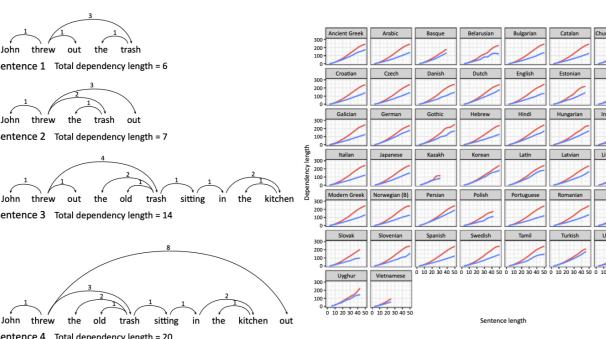
### これまで何がわかっている?

- Wordform [Zipf, 1949; Piantadosi et al., 2011; Mahowald et al., 2018]
- Semantic categorization(色 [Regier et al., 2007; Zaslavsky et al., 2018]、親族名称 [Kemp & Regier, 2012]、数 [Xu et al., 2020; Denic & Szymanik, 2024]、文法標識 [Mollica et al., 2021]、量化子 [Steinert-Threlkeld, 2021]、などなど)

- 構成性 [Kirby et al., 2015; Futrell & Hahn, 2024]
- 語順 [Gildea & Jaeger, 2015; Futrell et al., 2020; Hahn et al., 2021; Clark et al., 2023]
- 構造依存性 [Kajikawa et al., 2024] / 自由語順と項省略の文法相関 [梶川ら, 2025]



Zaslavsky et al. (2018), Fig. 3 より 色の名前は、コミュニケーションの最適解



Gibson et al. (2019), Fig. 4 より 語順は、依存関係の距離が短くなるようになっている

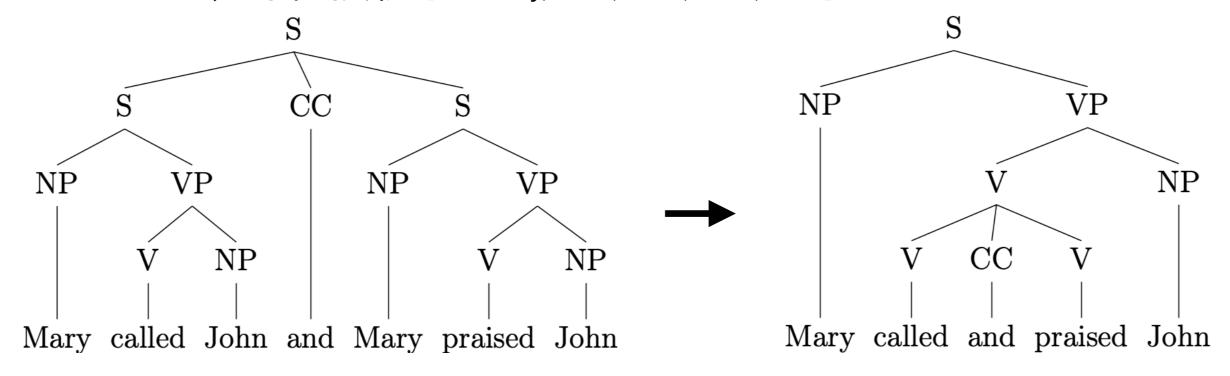
#### <u>何がおもしろい?</u>

- 普遍性(多様性)を領域一般の認知能力に帰する
- 言語が使用の影響を受けてるってアタリマエでは?
- その当たり前のことすら、場合によっては(根拠なく)否定されている
- 何が領域一般の認知能力で説明できるのかはっきりさせたい。
- 「最適解」とかいうけど、人間ってそんなに合理的?
  - 合理的ではない部分があるとしても、それが「どこでどの程度か?」というこ とを知るためには、合理的な理論が役にたつ (see also Griffiths (2024))

## Case Study1: 構造依存性 [Kajikawa et al., 2024]

#### 構造依存性は本当に領域固有のものか?

- コミュニケーションは付随的なもの (epiphenomena)?言語の本質では ない? [Chomsky, 2002; Hauser et al., 2002]
- 構造依存性 (structure dependence) は本質かつ領域固有のもの? [Hauser et al., 2002; Chomsky, 2005; Everaret et al., 2015, Berwick & Chomsky, 2016]
  - たとえば、等位接続 [Chomsky, 1957, 1955; Ross, 1967]



#### 単純性と情報伝達性のトレードオフ

単純性・情報伝達性と、コミュニケーションの効率性の定量化:

predictability (simplicity) := 
$$-H(\mathcal{U}) = \sum_{u \in \mathcal{U}} p(u) \log p(u)$$

parsability (informativeness) :=  $-H(\mathcal{T}|\mathcal{U}) = \sum_{i=1}^{n} \sum_{j=1}^{n} p(t, u) \log p(t|u)$ 

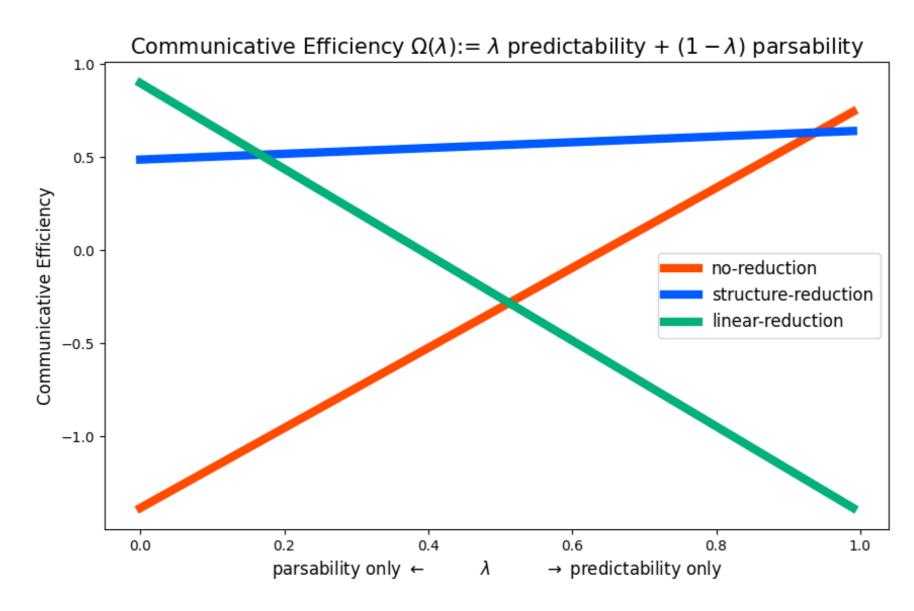
communicative efficiency :=  $\lambda \cdot \text{predictability} + (1 - \lambda) \cdot \text{parsability}$ ,  $(\lambda \in [0,1])$ 

#### 3種類の言語を設計

- Mary called John and Mary praised John 1. no-reduction言語:
- 2. structure-reduction言語: Mary called \_\_\_\_ and \_\_\_ praised John
- Mary called John and \_\_\_\_ praised \_\_\_\_ 3. linear-reduction言語:

	縮約あり	縮約なし
構造依存	structure-reduction	no-reduction
線形	linear-reduction	

### 結果:構造依存な縮約をもつ言語が(多くの場合)最適解



### 実験詳細

- 人工PCFGs [White & Cotterell, 2021]で64種類の語順の人工言語コーパスを作成
- それをもとに、縮約操作が異なる3種類の言語をそれぞれ作成
- predictabilityとparsabilityは、Reccurent Neural Network Grammars [Dyer et al., 2016]で推定

## Case Study2: 自由語順と項省略 [梶川ら, 2025]

#### 文法相関もまた領域一般な認知能力から説明可能か?

- 自由語順と項省略の存在には相関関係がある [Hale, 1980; Oku, 1998; Saito, 2002;
- こうした相関は**なぜ**存在するのか?領域固有のパラメータ?それとも?

#### 自由語順(かき混ぜ)

花子が 太郎を ほめた(主語―目的語―動詞) 花子が ほめた(目的語―主語―動詞) <u>項省略</u>

<u>花子が</u>太郎を ほめた(主語の省略) 花子が 太郎を ほめた (目的語の省略)

#### 記憶と予測のトレードオフ

- 単純性内で、記憶と予測の間にはトレードオフ関係がある
- 心理言語学研究において、この2つが文の処理負荷の要因 [Gibson, 2000; Lewis & Vasishth, 2005; Isono, 2024; Hale, 2001; Levy, 2008; Futrell et al., 2020]

#### √記憶に関する理論:Dependency Locality Theory (DLT [Gibson, 2000])

- 依存関係の距離が遠いほど、作業記憶での手続きで負荷が生じる
- "long-before-short"語順 [Hawkins, 1994; Yamashita & Chang, 2001]の選好も説明可能: 〈好む〉

[とても 赤い トマトを] [彼が] 収穫した [彼が] [とても 赤い トマトを] 収穫した

予測に関する理論:Surprisal Theory [Hale, 2001; Levy, 2008] • 単語の処理負荷は、その予測のしにくさに比例する:

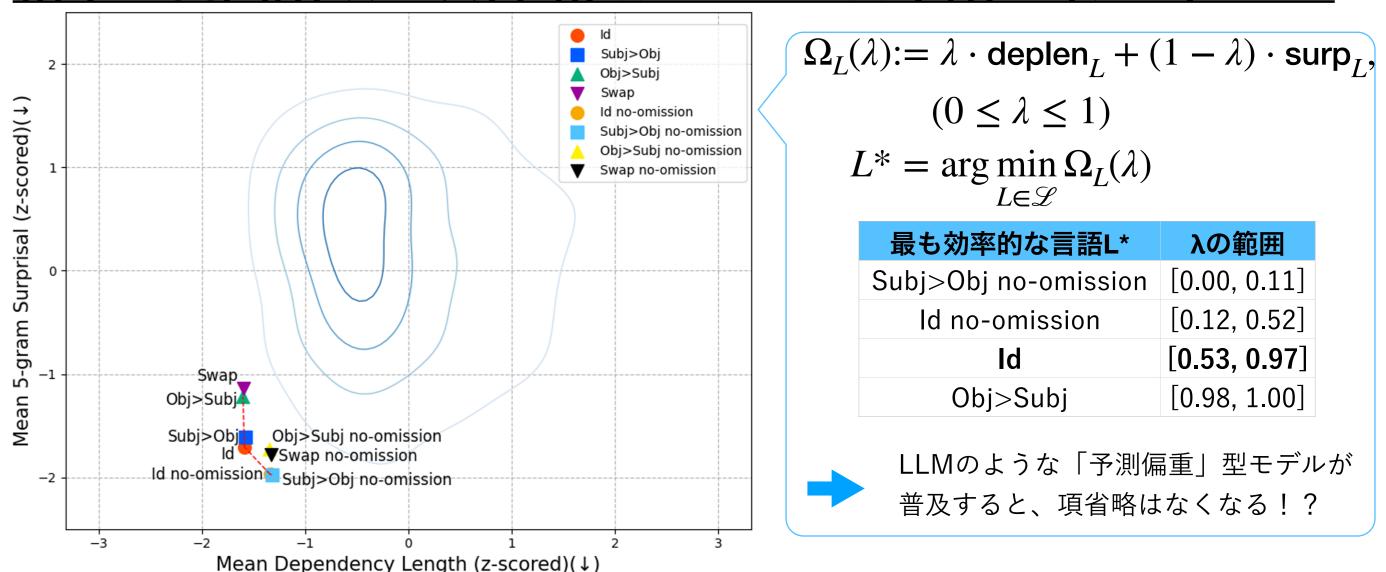
difficulty(w)  $\propto -\log P(w \mid \text{Context})$ 

• 項省略は、後続動詞のsurprisalが大きくならないように行われている[石月ら, 2022]

- 記憶と予測には**トレードオフ関係**がある [Futrell et al., 2020; Hahn et al., 2021]
- 自然言語の語順は、このトレードオフのもとで、効率的なように形作られている [Gildea & Jaeger, 2015; Hahn et al., 2021; Hahn & Xu, 2022]
- 自由語順と項省略は、記憶と予測の処理負荷に大きな影響を与える

自由語順と項省略の相関関係は、記憶と予測のトレードオフにより 説明できる?

### 結果:自由語順と項省略両方がある日本語は最適解の1つ



」憶と予測における処理点間ののでである。 【での処理負荷の推定値(カーネル密度推定)を表す 実験詳細

- UD\_Japanese-BCCWJ (v2.10, 長単位分割) [Asahara et al., 2018]とJAOJ [Ishizuki et al., 2024]を用いて、 (i) 依存構造と、(ii) どこでどのような項が省略されているかの情報を獲得
  - 3,428文、67,088単語+2,895単語分の項が省略
- Id: 語順をそのまま、Subj>Obj: 語順をS—Oに固定、Obj>Subj: 語順をO—Sに固定、Swap: S—OとO—Sの 関係を逆転、に加え、項省略あり/なしの**仮想日本語**コーパスを作成
- ベースラインとして、語順規則をランダムに再構築した文法×500を設計し、項省略あり/なしの合わせて 1.000の言語を作成